

泌 尿 器 科 紀 要

第 10 巻 第 8 号

昭和 39 年 8 月

随 想

自 然 の 風 物

東邦大学 大橋病院 巾 拓 磨

去る6月初め稲田教授より巻頭文に何にか肩のこらないものをとの御依頼があり、うっかりお引受けしたものの、果してその責を全うし得るかどうか甚だ心もとない次第であるが、最近街頭で目撃した事柄に関連して日頃感じている所を二三述べてみたい。

約1ヵ月半位前、大学よりの帰途或る駅前での出来事である。漸く美しい緑をつけてきた街路樹——当地は京浜工業地帯を近くに控え、緑に乏しく工場の煤煙にうすよごれた街であるだけに、昨年新に完成した駅前広場に植えられた柳の若木は、道行く人々の心に安らぎをあたえている——の根元で夥しい紙屑を焼いているのが目に入つた。傍らには近くの店主であろう50才前後の人がついてはいたが、燃えさかる真赤な焰は垂れ下つた柳の枝を吹き上げ、折角の枝も焦げ爛れている。「もう少し樹から離れた所を選んだならば……まことに心ないことを…」といささか暗い気持になつた。

こうしたことは都会の到る所で見かける風景であり決して珍らしいものでもなく、塵芥の始末に困る都民の窮余の策の現れでもあり、完全でない都当局清掃事業部の塵芥処理にも大いに責任があろうが、一人々々の都民にももう少し細かい心使いが望ましいものである。ほんの些細な事柄とは言え、例えば芦の湖の白鳥バーベキュー事件等とも共通するもので、公德心云々以前の事柄ではなからうか。

これに関連して私には印象深い一つの思い出がある。それは約25年前北満はチチハルに近い昂々溪（現在は改名されていると思う）で聞いたロシア人の話である。昭和14年の夏休み、文部省陸軍省の主催による興亜勤労報国隊々員（全国の旧制高校大学予科専門学校の学生をもつて編成された）の一員として彼地に渡つた時のことである。われわれの宿舎は満州国の小学校々舎で、校内には珍らしく樹木が多く、直径30cmもあるドロヤナギやアカンヤの木が繁つて、周辺の見渡す限りの草原とは全く対照的であつた。宿舎に入る前に宿営上種々の注意があり、その中に「特に校内の樹木は大切にしてほしい。これらはかつてこの地に移住したロシア人達が、自らの水筒の水を灌いで大切に育てた樹であり、彼等は馬さえも繋ぐことをしなかつたという。現在満州は草原のまま放置されている土地が多く、又部落にも樹木が少いのは、満人が立木を燃料にしてしまい、後に植林をしなかつたことが大きな原因といわれている。日本人たる君達は満人に劣るような行為はくれぐれも慎むように云々。」という意味の言葉があつた。最近都会の緑が少くなつたことを歎く投書や記事をみるにつけ、こんな古い話しが印象深く思い出される。

以上二つの事柄は、日光と緑に恵まれた環境に育った日本人と一年の大半を雪や氷に閉ざされて過す北国人との自然に対する考え方の相違を現わしているかも知れない。日本人は昔から自然を愛する国民として知られ、都会の猫の額のような庭にも木を植え、朝顔や盆栽の一鉢を大切に、又古代から花鳥風月を詩歌にたくし、心憎いばかりの心情を自然によせている。これは、日本全国土が温帯に属し恵まれた自然の中で長い間知らず知らずはぐくまれ身についた国民性ともいえよう。しかしその反面余りに恵まれ過ぎて一本の街路樹が枯死すること等は気にもとめなくなってしまうたのであろう。

御承知の通り、東京都は来る10月のオリンピック大会を控え、諸設備や道路網の整備に昼夜兼行の突貫工事が続けられている。一方ビル建築も益々盛んで、近く欧米なみに20〜30階の高層建築も実現するらしい。このような建設ブームのため、街では、道路は掘り返えされ砂塵はまい、ダンプ、ジャリトラの横行、車のラッシュに伴う交通戦争、スモッグ発生等まことに名状し難い様相を呈し、極端ないい方をすれば青空のない都会となつてしまった。その上長い間親しまれてきた桜並木も消え、美しかつた濠端も削りとられ、うつ蒼たる森も樹々は疎らとなり、その跡には巨大な高速道路が走り周囲とは不釣り合いなコンクリートの塊りが聳え、古くからの名所も姿を消してしまつた。更に幾つかの史蹟すらも、失われる寸前心ある人々の善意により保存されることにはなつたものの、他所に移転せざるを得なくなつた例もある。このように、ここ数年間の東京都の変貌ぶりは目を見張らせるものがある。東京都ばかりでなく、建設ブームは全国に広がり、以前は鄙びた静かな湯治地であつた所が一大歓楽地と化している。二次大戦中外人により爆撃をのがれた京都、奈良も御多分にもれず、心なき観光事業の犠牲となり、今度は日本人自らの手で損われつつあるときく。時代の変遷に伴い人々の生活様式も変り、旧いものが姿を消して行くことも或る程度止むを得ない事ではある。しかし先祖の文化遺産を傷つけ果ては葬り去つたあの明治初年の愚を再び繰り返すこともなからうし、山野を侵蝕して貴重な学問的資源を失わせ、美しい国土を破壊し去るような行為が許されてよいものではない。古代エジプトの水没文化遺蹟の救済に多額の金品を提供した為政者が、自国の文化財の保護と美しい国土の保全に無関心であるのはどうしたことであろうか。昨年本学の或る教授の欧州帰談の中で、ローマの遺蹟が紹介された。それによると、イタリア人が如何に自国の文化に誇りをもち、又その温存に如何に心をくだしているかが窺われ、本当に羨しく思つた次第である。霧とスモッグの都ロンドンでは、煤煙防止策を強力に押し進めた結果、これまで次第に姿を消しつつあつた公園の小鳥達が再び舞いもどつてきたと最近の新聞は報じている。小鳥といへば、やはり二次大戦中シンガポールの駅ホテルに投宿した時のこと、朝目をますと近くの公園から賑かな小鳥達のコーラスが聞え、彼等の囀りは、私に当地が戦場であることも又これから死闘続くビルマ第一線に赴任する身であることも忘れさせた。

毎日曜午前6時40分からNHK第1放送では、「自然とともに」が放送される。全国各地から、小鳥の声を中心に自然の風物を電波にのせる番組であるが、ここ数年来これを聞きながら、いま飼っている小鳥達の餌を作るのが私の日曜日の日課でもあり楽しみの一つである。徒らに膨脹を続け、人口増加とコンクリートの巨大さを誇り、雑然としてただもう騒々しいだけの現在の首都作りはこの辺でストップさせ、官民一体、欧州を始め南方諸国の都会のように、再び緑の多い落ち着いた而も能率的な街作りが推し進められ、その結果、都内での自然の風物詩が全国に放送されるような日の来ることを望みたいものである。